

文学に「ファンタジー」という分野があります。空想物語のことを指します。中世ヨーロッパが舞台になっていて、王様や王子、王女、騎士、魔法使いや妖精、ドラゴンなどが登場します。映画では「ロード・オブ・ザ・リング」とか『ハリー・ポッター』シリーズがそれにあたりますね。こうした物語には、特別な力を持ったリングや秘密のことがあって、それが、長い間封印されていた「奥義」を開くという設定があります。中国や日本にも、拳法や剣術の「奥義」や「秘伝」というものがあります。食べ物でも「秘伝のたれ」とか「秘伝のスープ」ということばを見たり聞いたりしますね。私は卑しいので「秘伝のたれ」なんて聞くとすぐにでも食べたくなくなります（笑）そんなわけで、聖書に「奥義」という言葉を見つける時、この言葉の中に何か古めかしいものを感じた何か秘密があるのかもしれないと思ってしまい「奥義」という言葉の意味を見失ってしまうことがあります。そうならないように、聖書の「奥義」という言葉が意味していることをしっかりと学んでおきましょう。

1) 明らかにされた奥義

まず聖書の奥義は追及するものではありません。「奥義」と訳されているギリシャ語は「ムステリオン」と言い、ここから英語の "mystery"（ミステリー）という言葉が生まれました。ミステリーという多くの人は、それを「謎めいたもの」「不思議なこと」という意味で受け取っていますが、聖書はそういう意味では使っていません。今朝の箇所「奥義は、啓示によって私に知らされました。」（3節）「それを読めば、私がキリストの奥義をどう理解しているかがよくわかるはずです。」（4節）とあり、エペソ 1:8-9には、「この恵みを、神はあらゆる知恵と思慮をもって私たちの上にあふれさせ、みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。」と書かれています。つまり聖書の「奥義」とは、はっきりと示されたもの、それを知って、理解できるものであると言われていています。新約聖書には「奥義」という言葉が27回使われていますが、そのどれもが、神の救いの計画を指しています。キリスト以前にも、神はさまざまな方法で、救いの計画を示してこられました。それが実現したのはキリストによってでした。キリストが人となってこの世に来られ、十字架の苦難を受け、復活し、信じる者に聖霊を与えてくださることによって、神の救いの計画、つまり「奥義」が私たちに知らされたのです。使徒パウロは、コリント第一 15章で復活について論じていますが、「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。」（コリント第一 15:51）と言って、世の終わりの復活のこともまた、キリストの復活によってはじめて明確になった「奥義」であると言っています。コロサイ 1:27では「この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」と言っています。神の救いの計画の中心は、まさにキリストご自身ですから、「奥義はキリスト」と言われているのです。エペソ 3:4に「キリストの奥義」とあるのは、この「奥義」がキリストによって明らかにされたということばかりでなく、キリストご自身が「奥義」そのものだという意味でもあるのです。エペソ 3:5に「この奥義は、前の時代には、今のように人の子らに知らされていませんでしたが、今は御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されています。」と記されています。このことばに従って、「奥義」を定義すると、「かつては隠されていたが、今は明らかにされた、キリストによる救いの計画」と言うことができます。

2) 神の奥義に生きる

次にキリストの奥義は魂にいのちを与えます。単なる知識ではありません。世界の歴史は、B.C.（キリスト以前）と A.D.（主の年）とに大きく区分されていますが、私たちの救いについても、「キリスト以前」と「キリスト以後」では、大きな違いがあります。聖書にはキリスト以前の私たちの存在は「罪の中に死んでいた者」（2:1）「生まれながら御怒りを受けるべき子ら」（2:3）「この世にあって望みもなく、神もない人たち」（2:12）だったのです。ところが、キリストを信じ受け入れた後は「聖徒たちと同じ国の民」「神の家族」（2:19）となりました。今日のエペソ 3:6では、このことを、「共同の相続人」「ともに同じからだに連なって」「ともに約束にあずかる者になる」という三つの言葉で再確認しています。「共同の相続人」とは、神がアブラハムに与えると約束された祝福を、アブラハムの子孫でない私たちが、それにあ

ずかることができるという意味です。「ともに同じからだ」とは神が、ユダヤ人も異邦人もともにキリストのからだの一員としてくださり、一体となった教会を建て上げてくださることを表しています。「ともに約束にあずかる」というのは、神がイスラエルに与えてくださった約束が、イエス・キリストによって私たちのものとなっているということを教えています。3つのどれも「一緒に」という「スン」ということばがついています。よく「神の祝福と恵みがありますように」ということばはことばとしては美しいですが確かにそれがあろうという根拠と言えれば非常に不確かです。何をもってそんなことが言えるのか？あなたの言うことと神の祝福と恵みは何か関連性があるのですか？そう問われると何も言うことができません。しかし聖書はキリストはそれらをすべて与えてくださると言います。何故ならキリストを信じている者は同じ祝福、同じ恵みにあずかることが約束されているからです。ですからキリストを信じているか信じていないかということは今どれくらい感じられるかどうかを超えて信じられないぐらいの結果をもたらすということです。言い方を変えるとキリストというお方が私の人生を根本的に変える力を持っておられるということです。学生時代住んでいたクリスチャンの大学生の寮からチームを組んでアメリカ旅行をいたしました。アイダホ州のある町を訪問した際、私はやや年輩のお医者さんのお宅にホームステイしました。留めていただく部屋で夜遅くまでいろんな話をして、では最後にお祈りをしましょうと言う時にこのご夫婦はベッドわきにひざまずかれ、両手をベッドにおいて祈られました。それはとても自然な流れで毎日そうやって祈っておられるんだろうなと思いました。そして思いました。「同じイエス様に祈りを捧げているのに神様の前に入る姿勢が全く違う。神を崇めるとはこういうことなんだ」と。そして自分の姿が本当に恥ずかしく思えてきました。キリストはこの夫婦の人生を大きく変えたのです。キリストを知っているとと言っても千差万別です。しかし明らかにされた「キリストの奥義」を信じた私たちは、次には、それをさらに深く理解できるように求めなくてはなりません。コロサイ 2:2 に「私が苦闘しているのは、この人たちが愛のうちに結び合わされて心に励ましを受け、さらに、理解することで豊かな全き確信に達し、神の奥義であるキリストを知るようになるためです。」ということばがあります。これは、パウロの信仰者としてのゴールを言い表したのですが、「神の奥義」であるキリストをさらに深く知ることは、すべてのクリスチャンのゴールでもなければなりません。「キリストの奥義」は信じる者には誰にでもはっきりと理解できるものですが、だからといって薄っぺらなもの、底の浅いものではありません。それは求めれば求めるほど、さらに豊かなものになっていく奥深いものなのです。

3) 伝えるべき神の奥義

キリストの奥義は伝えられるために神が明らかにされました。ですからこの奥義を人々に伝えることができるよう祈りましょう。使徒パウロはコロサイのクリスチャンに「私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。また、私がこの奥義を、当然語るべき語り方で、はっきり語れるように、祈ってください。」(コロサイ 4:3-4) とお願いしています。パウロは「キリストの奥義」を知らされたことを感謝しています。それに感謝するだけで終わらず、この「奥義」のために牢に入れられることになりましたがそこで祈っていたことはどうやってキリストの奥義を伝えることができるのかということでした。パウロですらどういう風にしたらキリストの奥義を伝えられるかで悩み祈っていたのです。福音を伝えることが得意な人はどこにもいません。それこそ伝道の奥義、秘訣があれば私が教えて欲しいです(笑) メッセージの中で時々、ルターのことを取り上げていますので今日はカルヴァンのことを取り上げたいと思います。ジャン・カルヴァンは、パリで古典文学の研究者としてデビューしましたが、宗教改革に触れ、プロテスタントの信仰を持つようになりました。彼はパリ大学総長のために福音的な講演の原稿を書いたというので、パリから追われ、スイスのバーゼルに行きました。カルヴァンはバーゼルで『キリスト教綱要』を書きましたが、それが出版されないうちにバーゼルを去ってフランスに戻り、もういちどバーゼルに行こうとしたのですが、この旅行の途中、その地域で戦争があって、回り道をする事になり、行く予定のなかったジュネーブの町で一夜を過ごすことになりました。その時、ジュネーブの町に、カルヴァンが『キリスト教綱要』の著者と知る人がいて、その人

はジュネーブの教会を指導していたファレルにそのことを知らせました。ファレルは、カルヴァンをその宿に訪ね、この町にとどまってくれるよう頼みました。繊細で年若いカルヴァンは改革者になるつもりなど毛頭もなく、自分はこれから古典文学の研究を続けていきたいと断ります。それでもファレルはカルヴァンに懇願し、カルヴァンは、自分にかまわないでくれと哀願します。そのようなことが何度も繰り返された後でファレルは全身を打ち震わせながら、雷の鳴りとどろくような声でカルヴァンに向かって言いました。「全能の神のみ名によって、おまえに宣告する。もしおまえがわれらと共にこの地にいて、この聖なる神のみわざに専念するのを拒むようならば、神がおまえをのろうだろう。おまえはキリストより自分を大切にしているからだ。」カルヴァンはこのファレルの「脅迫あるいは恫喝」のようなことばによって、ジュネーブの改革者としての道を歩みはじめました。カルヴァンは「キリストの奥義」を知り、深く理解した人でしたが、それだけで終わらず、使徒パウロに劣らないほどの苦難を耐え忍び、「キリストの奥義」を宣べ伝える人となったのです。

私たちはどうでしょうか。それぞれの家庭や職場の状況あるいは人間関係によって、キリストを伝えることを躊躇してしまうことがあるかもしれません。福音が躓きになるからといって福音以外のものを代用品として与えてしまったり、お茶を濁して終わるようなことがあるかもしれません。信仰は個人のことだからその人に任せるしかないと割り切ってしまう人もいるかもしれません。そのどれも悪いわけではありません。ただ神の御心は「キリストの奥義」を知らされた者がそれを大胆に語る者となって欲しいということです。あなた以外に誰があなたと関連のある人に福音を伝えるのでしょうか？